

児童生徒福祉作文集 第42集

# みんなが えがおになる くらし

令和4年度（2023年2月）

社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会



---

第42集  
児童生徒福祉作文集

令和4年度（2023年2月）

編集・発行 社会福祉  
法人 鹿嶋市社会福祉協議会

後援 鹿嶋市教育委員会

〒314-0012 鹿嶋市平井1350-45（鹿嶋市総合福祉センター内）  
TEL 0299-82-2621・FAX 0299-83-0242  
ホームページ <http://www.kashima-shakyo.jp>  
Eメール [k-shakyo@sopia.or.jp](mailto:k-shakyo@sopia.or.jp)

---

この事業は皆様から寄せられた赤い羽根共同募金の分配金によって運営されています。



## 「第四十二集」

## 児童生徒福祉作文集」の

## 発刊にあたって

社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会会長 田口伸一

今年度で四十二回目を迎える児童生徒福祉作文事業には、市内小・中・高等学校の児童生徒の皆さんから合わせて一、二九二編の応募をいただきました。

この事業は、児童生徒の皆さんが家庭や学校・地域社会の生活の中で思いやりの心を持ち、ふれあいの輪を広げ、明るい福祉のまちづくりに参加するきっかけとなることを願って実施しております。

今年度はテーマを一新し、「みんなが えがおになる くらし」としました。寄せられた作品には、笑顔から広がる支え合いやふれあいななどに書いて書かれたものが多くみられました。笑顔がもつ、人とひと・人と地域をつなげる力を実感し、そのつながりが福祉に結び付くことに気づき、誰もが幸せに暮らすことのできる社会を願う姿に、将来を担う子どもたちの頼もしさを感じました。また、福祉は何気ない日常生活の中に存在しており、決して特別なことではなく身近にあることに気づき、思いやりや助け合いを意識した家族や友人、地域との関わりについて、それぞれの考えを深めた作品も多く寄せられました。こうした作品の一つひとつが、多様性を認め合い、誰もが安心して暮らせる社会の実現につながるものと願っております。

当協議会といたしましては、本事業を通して児童生徒が深めた福祉に対する意識を、将来にわたりもち続けることができるよう、今後も福祉体験学習の実施や学生ボランティアの育成に取り組んでまいります。また、市民の皆さまの福祉に対する意識啓発のため、ボランティア活動やサロン活動などを中心とした地域福祉活動をさらに推進してまいります。そして、地域福祉活動計画の基本理念である「共に創る みんなで支え合う 福祉のまち かしま」の実現に向けて、市民の皆さまや各福祉団体、ボランティア、事業者、行政などと連携を図り推進してまいります。と思います。

結びに、この児童生徒福祉作文事業につきまして、多大なご協力をいただきました関係者の皆さま並びに福祉作文の審査にあられました委員の皆さまに心から感謝を申し上げます、発刊のあいさつといたします。

# 目次

発刊のことば

社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会会長

田口伸一

## 最優秀（小学生の部）

ゆうせんせき

ユニバーサルデザイン

目の見えない人が安心してくらせるために

えがおはいつもいつしよだよ

笑顔あふれる公園

ヘアドネーションで広がる笑顔

中野西小学校 一年

鹿島小学校 二年

中野西小学校 三年

大同西小学校 四年

大同西小学校 五年

鹿島小学校 六年

渡部 須澤 生井 阿久津 立原 大塚

須澤 生井 阿久津 立原 大塚

生井 阿久津 立原 大塚

阿久津 立原 大塚

立原 大塚

大塚

## 最優秀（中学生の部）

思いやりの恩返し

ばあばのコミュニケーション

誰もが手を取り合える未来にするには

鹿野中学校 一年

鹿島高等学校 附属中学校 二年

鹿島高等学校 附属中学校 三年

鈴木 木 寿福 真結

寿福 真結

真結

## 最優秀（高等学校生の部）

今の自分に問い返す

ボランティアと成長

鹿島高等学校 一年

鹿島高等学校 二年

森田 有香

森田 有香

10 9

8 7 6

5 4 3 2 1 1

【鹿嶋市障がい者福祉計画において「障害者」を「障がい者」と標記することで統一しています。本冊子もそれに準拠するかたちで標記させていただきます。】

## 優 秀 (小学生の部)

「バリアフリー」ってなあに  
 みんながえがおになる暮らし  
 しんせつのバトン  
 わたしの家ぞく  
 幸せな福祉  
 ボランティアでまちをきれいに  
 しょうがいのある妹  
 言葉は大切  
 私の宝物  
 私ができること  
 小さななみばとさん  
 理想のかい護

豊津小学校 六年	波野小学校 六年	鉢形小学校 五年	三笠小学校 五年	中野西小学校 四年	中野東小学校 四年	中野東小学校 三年	高松小学校 三年	大同東小学校 二年	高松小学校 二年	鉢形小学校 一年	鉢形小学校 一年
山	植	大	笹	佐	小	秋	豊	池	浦	平	城
町	木	竹	沼	藤	澤	田	田	田	橋	野	内
彩	蒼	滯	華		海	陽	碧	奈	優	香	史
奈	太	羽	梨	隼	音	亮	斗	央	和	乃	也
19	18	17	17	16	15	14	13	13	12	12	11

## 優 秀 (中学生の部)

いつか言葉の壁をこえて  
 「大丈夫」を聞き逃さないこと  
 ありのまま  
 あの経験を生かして  
 少子高齢化問題について  
 きっかけ一つで  
 思いやりをもって

鹿島高等学校 附属中学校	鹿島高等学校 附属中学校	平井中学校	大野中学校	鹿野中学校	大野中学校	大野中学校	鹿島高等学校 附属中学校
一年	一年	二年	二年	三年	三年	三年	三年
鈴木	林	植	武	宮	工	西	鈴木
木	由	美	内	崎	藤	田	木
結	結	美	こ	美	美	太	結
衣	結	結	ま	湧	寛	志	衣
20	21	22	23	24	25	26	20

## 優 秀 (高等学校生の部)

その言葉、本当に必要？  
 笑顔にさせるためにできること  
 支えあい  
 高齢社会について  
 人と人を繋ぐもの

鹿島高等学校	鹿島学園高等学校	鹿島高等学校	鹿島高等学校	鹿島高等学校
一年	一年	二年	二年	二年
石	大	原	新	石
川	槻	田	井	坂
夢	咲	沙	美	さ
華	花	良	羽	く
28	29	30	31	32

## 佳作入選作品

### 児童生徒福祉作文応募数

あとがき・児童生徒福祉作文審査委員

36 35 33

# 最優秀（小学生の部）

## ゆうせんせき

中野西小学校 一年

渡部裕也  
わたなべ ゆうや

ぼくは、なつやすみにかぞくでりょこうにいきました。ひこうきやでんしゃ、ふねなどいろいろなのりものにのりました。とてもたのしかったです。

くうこうでひこうきにのるのをまっているとき、あいているせきにすわろうとしたら、おとうさんに、

「そこはゆうせんせきだからあっちにすわろう。」  
といわれました。

ぼくは、はじめて「ゆうせんせき」ということばをききました。おかあさんにきくと、

「おじいちゃんおばあちゃん、からだのふじゆうなひとがゆうせんしてすわれるせきだよ。」

とおしえてくれました。ほかにもケガをしているひとや、にんぷさんなどがゆうせんしてすわれるそうです。

ゆうせんせきは、ほかのせきとはちがいマークやもじがかいてありイヌのいるなどもちがうのでわかりやすくなっていました。みんなにきづいてもらえるようにしてあるんだとおもいました。

しらすにすわろうとしてしまっただけ、そういうせきがあるというこ

とをすることができたので、つぎにゆうせんせきをみついたらすわらずに、ゆうせんせきがひつようなひとにすわってもらえたらとおもいました。でんしゃにのったときは、ゆうせんせきではなかったけど、たつてのつていたぼくにしらないおじさんがせきをゆずってくれました。ぼくは、やさしいなとおもいうれしいきもちになりました。ぼくも、ゆうせんせきじゃなくてもだれかにせきをゆずってあげられるやさしいひとになりたいです。

ゆうせんせきだけじゃなく、まだまだぼくのしらない、いろんなひとにやさしくするマークやくふうがあるとおもいました。そのマークを一つでもおおくみつけてすることで、こまっているひとがいるときに、たすけてあげることができたらうれしいです。

## ユニバーサルデザイン

鹿島小学校 二年

須澤結々  
すざわ ゆづゆ

パパとおふろに入っている時、頭をあらおうとシャンプーをさがしているとき、

「このギザギザって何？」

ギザギザがついたボトルとそうじゃないボトルがあることに気づきました。よく見ると、シャンプーのボトルにはギザギザがあつて、リンスのボトルにはありませんでした。これが何か気になってパパと、けいたいであらべたら、ユニバーサルデザインだと分かりました。

ユニバーサルデザインとは、だれでもつかえて、つかいやすい形につくられているものことだそうです。さわるだけでシャンプーとリンス

が分かるようになっていて、わたしのように目をつぶったまま、シャンブーとリンスをまちがえる人が多いことや、目のふじゆうな人たちのためにくふうした形になっているそうです。

わたしは、ほかにはどんなのがあるのかさがしてみることにしました。お店のじどうドア、センサーで出る水どう、スロープやトイレのウォシユレット、大きな電気のスイッチ、かいだんの手すり、日本ごだけじゃなく、がいこくごで書いてあるパンフレットなど、いえの中やそとでいつもつかっていたり、見たりしているものの多くにユニバーサルデザインがつかわれていました。

今まで気がつかなかったけれど、わたしたちのまわりにはユニバーサルデザインがいっぱいあるんだと分かりました。また、お年よりや、小さい子ども、がいこくの人、車いすの人などみんなにやさしく、みんながつかえるユニバーサルデザインがもっともつとふえたらいいなと思いました。

## 目の見えない人が安心してくらせるために

中野西小学校 三年

なまいざわ  
生井澤 美 来

わたしは、総合的な学習の時間に「ふくし」について学習をしています。わたしは、はじめ「ふくし」ってなんだろうと思いました。病気の人、外国の人、高れい者、目が不自由な人、耳が不自由な人、車いすに乗っている人、いろいろな人を思いうかべました。みんなが安心してくらせることなのかなと、考え始めました。

五月に「アイマスク体験」を行いました。体験をする前は、目の不自

由な人が生活するのは大変だろうなあとなく思っていました。自分がアイマスクをつけて、目の不自由な人になってみると、本当に大変でした。かいだんの上り下りをしたり、細いところを通りぬけたり、川をまたいだり、いすにこしかけたりと、こわくてなかなか前へ進めなかつたです。終わったときは、ホッとしました。また、かいじよする人になるのも大変でした。何と言ったらいのか、なかなかいい言葉が見つからず、声も小さくなつてしまいました。かいだんの時は「あと、なんだんでつくよ」とすぐには出ませんでした。かいじよする人がまよっていたら、私が体験したように、目の不自由な人は不安を感じてしまうだろう。道路を歩くときの段差や車が近づいてきた時はどうやってよけるのか、こわい思いをするだろうと思いました。わたしは、安心して歩けるように、タイミングを考えて自信をもって声かけをすることが大事だなと考えました。

この学習を通して、目の不自由な人が安心してくらせるように、家の中や町の中には、工夫がないのかなときよう味をもちました。夏休みに調べてみると、点字が様ざまなところについていることを知りました。家の中では、すいはんきやせんたくき、れいぞうこにトイレ、ソースやドレッシング、シャンブー、まだまだあります。わたしたちがさわるものほとんどに点字がついていてびつくりしました。町の中にも、エレベーターの上下のボタンや何かいかをしめすボタン、横だん歩道の信号き、ゆうびんポストの手紙やはがきを入れるところ、ゆうびん物を集める時こくが書いてあるところ、銀行のATMなどについていました。

わたしは、目の不自由な人が安心して利用できるようにしている点字ってすごいなと思いました。目が不自由な人にとって手は目と同じなんだなあと気づきました。そこで、さらに点字の歴史についても調べま

した。点字は暗号からきているそうです。様々な工夫があり、六十三通りの組み合わせで、今の点字が出来上がったそうです。

わたしは、目の不自由な人が安心してくらせる工夫をもっと見つけていきたいと思います。点字の読み方や書き方も学習したいです。そして、目の不自由な人が学校にたずねてきたら、どの部屋かすぐ分かるように教室の名を点字で作ってほしいです。

## えがおはいつもいっしょだよ

大同西小学校 四年

阿久津 彩衣

休みの日になると、わたしのまわりでひんぱんに聞こえてくるのは、「早く宿題をやりなさい。」

と言うお母さんの声。『今、やろうと思ってたのに…』わたしの心の声。いろいろな声が聞こえるお家時間は、わたしのお気に入りの時間です。

わたしは、家族といっしょにいる時間がとても大好きです。お姉ちゃんときんかをしてしまった時やお母さんにおこられている時には、いかな時間に早変わり。しばらくすると、いつの間にか、お家の中は、えがおがいっぱいにもどっています。なぜなら、家族の思いやる気持ちがあるからです。では、家族の思いやりってどういうことなのか、ふだんの生活をふり返ってみました。

一つ目は、家族からもらっている思いやりについてです。わたしが保育園のころ、

「つかれたから、おんぶして。」

と、わたしが言うと、お姉ちゃんは、

「しよがないなあ。少しだけだよ。」

と言って、わたしのことをおんぶしてくれることができました。しかし、時には、

「自分のことは自分でやらなきゃだめでしょう。」

ときびしく言われた時もありました。お姉ちゃんのやさしきときびしさには、お姉ちゃんの思いやりがかくされていると思います。

二つ目は、わたしが家族にあたえる思いやりについてです。とは言っても、どんなことをしているのか分からず、お母さんに聞いてみました。お母さんは、

「せきをした時に、すぐにせ中をさすつてくれてうれしかったよ。」

「おふろそうじをするからね、と進んで手伝いをしてくれてうれしかったよ。」

「買った物をして、重たいふくろを持ってくれたり、洗たくものをたたんでくれたり、お母さんを助けてくれてありがとう。」

など、数えきれないほど言っていました。自分では気づかないうちに、家族のために何かをしているのだなと感じました。お母さんは、

「さりげなくしてくれるやさしさに、思いやりがたくさんつまっているんだね。」

と、わたしの頭をなでて、ぎゅつとしてくれました。

このように、家族に対する思いやりには、えがおがいっしょについていることが分かりました。家族みんなが家族のだれかを思い、しかっている時、心配している時、うれしい時、どんな時にも年中無休で思い続けていることを知りました。思いやりって目に見えないけれど、心で感じて、えがおになつて見えてくるものなのかなと思いました。これからも、家族みんなのえがおと、わたしのえがおは、いつもいっしょだよ。



## 笑顔あふれる公園

大同西小学校 五年

立<sup>たち</sup>原<sup>はら</sup> 柚<sup>ゆず</sup>奈<sup>な</sup>

私には、「さっちゃんのおじいちゃん」、「さっちゃんのおばあちゃん」とよんでいる人がいます。二人とは、家の近くの公園で出会いました。自転車のかごには、いつも、「さっちゃん」という犬を乗せていました。さっちゃんは、とても小さくて、もふもふで、かわいい犬でした。二人は、遊んでいる私に話しかけてくれて、さっちゃんをさわらせてくれました。それから公園で会うと、さっちゃんと追いかけてつこをしたり、二人と話したりするようになりました。二人は、とても話しやすく、気が合うので、こんなに明るく、やさしい人に出会えて、とてもうれしいと思いました。公園での出会いが、楽しい時間をくれ、笑顔の花をさかせてくれました。

ところが、公園に行っても、いつもいるはずの二人とさっちゃんに会えない日々が続きました。何かあったのかな、と心配しました。私は、さっちゃんの家も、本当の名前も知らないのです、家をたずねることはできません。さっちゃんたちが来ない公園は、楽しくなくなり、私も公園へ行かなくなりました。

そんなある日、久しぶりに二人を公園で見ました。二人は、何だか悲しそうで、さっちゃんがいまませんでした。私は二人に、最近来なかった理由を聞きました。すると、さっちゃんが死んじやったことを教えてくれました。私は、とても悲しくて、さっちゃんの死を受け入れられず、泣いてしまいました。二人も、とても大切に育ててきたさっちゃんの死

を受け入れられなかったと思います。私も、同じ経験をしたことがあるので、気持ちが良く分かりました。そしてまた、二人を公園で見ることがなくなりました。

ある日、公園の近くを通りかかると、二人と一匹の犬が仲良くベンチに座っていました。私は、走って公園に行きました。

「その犬はどうしたんですか？」

と私は聞きました。二人は、

「新しく飼った犬だよ。」

と言いました。名前は、さっちゃんです。

「さっちゃん二号だよ。」

と言って笑っていました。私は、新しいさっちゃんと一緒に遊び、そして、二人と話して一緒に笑いました。新しいさっちゃんに元気をもらうことができました。さっちゃんは、私と同じように、二人のことを元気づけてくれる存在だということに気が付きました。

公園での出会いが、私の生活の中で笑顔になる場所をふやしてくれました。初めは全く知らない人でも、少しずつ話すことで、心が通じ合い、親しい関係になれると思います。そのような関係が、笑顔のあるくらしにつながると 생각합니다。笑顔のあるくらしは、みんなで助け合い、やさしくできる社会につながると 생각합니다。このような社会にしていきたい、みんな笑顔の花をたくさん咲かせたいです。

## ヘアドネーションで広がる笑顔

鹿島小学校 六年

大塚悠実

「ヘアドネーション」とは何か、知っていますか。「ヘアドネーション」とは、病気や事故などで、かみの毛を失った子ども達のために、寄付されたかみの毛で、ウィッグを作り提供するボランティア活動です。かみの毛を寄付するには、三十一センチメートルのばす必要があります。

私は、今までに三回ヘアドネーションをしたことがあります。三十一センチメートルかみの毛をのばすためには、私の場合いつもだいたい二年半ほどかかりました。かみの毛を洗う時や、結ぶ時など、のばして大変なこともあります。いやだと思っただけではありません。それは、私のかみの毛を寄付することで、喜んでくれる人が必ずいるはずだからです。私は人の役に立つことが好きなので、このヘアドネーションの活動を知った時には、喜んで参加しました。母もヘアドネーションをするためにのばして、近くの美容室の美容師さんに話してみたり、美容師さんが協力してくださり、かみの毛を三十一センチメートルの束に切っていただけになりました。それからは、いつもそこで切ってもらっています。かみの毛を三十一センチメートル切る時は、「ついにかみの毛を切る日が来た」というきんちょうや、「今まで大切に生きてきたかみの毛を切ってしまうのか」というさびしい気持ち、「このかみの毛をもらってうれしい気持ちになってくれる人がいるのだ」という晴れやかな気持ちなどが混ざり合い、とても複雑な思いになります。そ

して、切られて今から遠くへ飛び立つ自分のかみの毛を見ると、なんだかほこらしい気持ちになります。いつもそうです。また、かみの毛を送った後は、決まっていますがすがすがしい気持ちになります。人の役に立つのは気持ちが良いと実感します。もちろん、切られたしゅん間から寄付するためのかみの毛をのばすことははじまっています。

ヘアドネーションのために協力してくれた美容師さん、みんなが寄付したかみの毛を集めてウィッグにしてください。そして、自分のかみの毛を寄付する方々など、たくさんの方々の協力でヘアドネーションの活動はできています。ヘアドネーションは、気軽にできる、すばらしい活動だと思います。私は、ヘアドネーションをこれからもずっと続けていきたいです。そして、多くの人に笑顔になってほしいです。私の周りの人達の中にも、ヘアドネーションをしている人はいます。私はヘアドネーションのことを母から教えてもらいました。私も、身近な人にヘアドネーションを広めていきたいと思っています。



## 最優秀（中学生の部）

### 思いやりの恩返し

鹿野中学校 一年

鈴木 木 龍

僕の母は、今年の三月に新型コロナウイルスにかかってしまいました。いつも洗濯物や、朝昼晩の食事の準備や、食べ終わった後の食器洗いなどの片付けや、掃除をしてくれている母が突然、ホテルに隔離されることになってしまいました。

心配な気持ちや不安な気持ちもありましたが、初めは勉強をしなくても怒られないと思つて少し嬉しい気持ちがありました。しかし、誰が家事をやるの？と考えると、いつも任せつきりなので、何からやればいいのか、残った家族全員分かりませんでした。とりあえず食事などは、父が買ってきてくれたり、冷蔵庫にある物を料理して用意してくれたりしました。洗濯物は、みんなで干しました。たくさん量があつて、とても時間がかかつて大変でした。今まで何とも思つていなかったけれど、これを毎日してくれている母は、本当に大変なんだと、身をもって知りました。今まで誰かがやってくれるだろうが、当たり前になつていました。また、家事以外でも、注意やアドバイスなどいつも母が言ってくれることがなくなつて寂しかったです。その後、家庭内感染で僕も、新型コロナウイルスにかかつてしまいました。大好きなサッカーもできず、家にいるばかりで、そこで改めて健康でいられることの大切さを知りました。

小学校の卒業式にも出席できませんでしたが、友達が心配してたくさん連絡をしてくれました。友達が一緒に卒業式の写真に収まるように、手作りの顔写真入りうちわを用意してくれました。恥ずかしかったけれど、みんなが想つてくれる気持ちが嬉しくて、余計に友達のことが大好きになりました。普段直接言つたりはしないけれど、大好きな存在だと改めて感じる事ができました。

自しゆく中は、いつもよりたくさん家族と過ごす時間がありました。いつも各々の予定に追われているので、こんなに長い時間、全員一緒にいるのは、初めてかもしれません。いつもは、しない話がたくさんできました。一緒にいる時間が長いせいで、腹の立つこともたくさんありました。普段自由な時間が欲しいと思つていましたが、いざ時間がたくさんあると何をすればいいのか分からなくて、目的の無い自由時間は、自分にとって本当の自由ではないのだと気付きました。また、家族の誰か一人でも調子が悪いと、心から楽しく過ごせないことにも気付きました。近くに住む祖父、祖母も色々助けてくれて本当に助かりました。いつも見守ってくれる存在がいて、僕は幸せ者だと思いました。

優しさや思いやりは、普段から自分の周りにあふれています。でも、日常の中ではなかなかそれに気付くことはありません。今回コロナになつたことで、自分の優しさや思いやりにも、気付くことができました。ありがとうと何度も思うことができました。優しくされると、自分も人に優しくありたいと思いました。また、大切な人達には元気で笑顔でいてもらいたいと強く思いました。

僕ができることは限られているけれど、みんなが笑顔になれる行動をしたいです。祖父母には今まで以上に会いに行ったり、話しをしたりしたいと思います。友達には、つい文句を言ってしまうこともあるけれど

ど、一緒にいて楽しい気持ちや感謝している気持ちも、時々素直に言えたらと思います。母には、毎日大変な作業をしてくれて、感謝でしかないのです、これからは、自分から積極的に行動できるように考えたいです。

## ばあばのコミユカ

鹿島高等学校附属中学校 二年

壽じゅ 福ふく 結ゆい 香か

私の祖母はすごい。他者と笑顔で接するコミュニケーション能力、これに関して、私は身近で祖母より優れている人をまだ知らない。

私の家はレストランを営んでいる。といっても、みんなが思い浮かべるようなファミリールレストラン並みの大きさではない。四人がけテーブルが六つの、祖父母が経営する小さな飲食店だ。そんな小さなレストランは、昼になるといつもお客さんで賑わっている。お昼休憩の会社員や学生さん、常連さんや観光客まで様々な人達がご飯を食べにここへやって来るのだ。

さて、では何故、このレストランはここまで愛され続けているのだろうか。私は最近お店のお手伝いをするようになり、素朴な疑問をもった。

考えてみれば心当たりはたくさんある。駅からも学校からも、観光名所の鹿島神宮からもそう離れていない、良い立地だ。そして調理場担当の祖父が作る料理は、どれを食べてもほっぺが落ちてしまうほどおいしいのである。しかし、それだけではないと気付いたのは、私が調理場で盛り付けの手伝いしていた時のことだ。

その日、ホール担当の祖母は、足の痛みを抱えていた。病院にも行っ

たが、まだ回復しない。祖母は、あまり動けないからと、一時的に居間で休憩したのだが、そう、ホール担当がいなくなったのである。

中学生の私は接客対応に自信がもてない。だから祖父がホールと調理場を行ったり来たりする形になった。当然すごく大変になる。注文を聞く祖父の横顔を遠くから見ながら、私はふとあることに気付いた。

「じいじの接客は、シンプルすぎるのでは？」

お客さんが来店したときの「いらっしやいませ」から感じていた、祖母との接客の違い。

この違いが、このレストランが長く愛され続ける理由の一つであると気付いたのだ。

これは、祖父がシャイなのではなく、祖母のコミュニケーションの力が高いのだと思う。まず、最初の挨拶である。祖父の「いらっしやいませ」は下に下がるイントネーションなのに対し、祖母は、段々と上に上がっていく感じなのである。声高らかに発声するのは、祖母の特徴の一つである。この特徴は、接客の全体にわたる。注文を取る時、注文を伝える時、そしてお客さんが帰る時。祖母の声の調子は、その場の空気も盛り上がらせる力があるのだ。

そしてもう一つの特徴は、何かしら自分から話しかけていることである。祖母はお客さんが来た時、注文を聞く時、料理を運ぶ時、お会計の時のどこかで、必ずと言っていいほどお客さんと会話している。それはただ仕事を進めるだけなら不要な、お客さんとのちょっとしたお喋りである。

「素敵なカバンですね。観光ですか。」

「この近くに住まわれているんですか。」

「お久しぶりですね。元気ですか。」

「あつ、こちらのアメ、良かったらどうぞ。」

そのせいだろうか、祖母は知人がすごく多い。また、お客さんのことをよく気にかけており、時々私に、

「あの一番テーブルの方達は工事の人なのよ。疲れているだろうから、多めにしてあげてね。」

などと、人に合わせてアドバイスしてくれるのだ。だからだろうか。ほとんどのお客さんが、祖母と仲が良いのだ。このレストランは、そうやって愛されてきたのかもしれない。

祖母のコミュニケーション能力はすごい。これに関して、祖母より優れている人はやはりまだ知らない。地元の人達を全部たどっていったら、どこかでみんな祖母と繋がっているのだろうか。私はいつか祖母のような、笑顔でたくさんの人と接することのできる人になりたいと思っ

## 誰もが手を取り合える未来にするには

鹿島高等学校附属中学校 二年

杉そま澤さわ真ま季き

私は、母が介護福祉士なので、介護についての話をよく聞きます。また、祖母とも一緒に住んでいるので、介護やお年寄りのことを身近に感じてきました。

私はチアダンスを習っています。私はチアダンスが大好きで、幼稚園の頃から今でも続けています。そのチアダンス教室では、練習したダンスを、地域のイベントで披露する活動をしていて、たくさんの人を応援し、それを観てもらうために練習を頑張っています。

観てくれる人の中には地域のお年寄りの方も多く、私達のダンスで笑顔になってくれると、とてもやり甲斐を感じます。そのイベントの中で、一番印象に残っていることがあります。とある介護施設でダンスを披露したとき、そこには車椅子に乗っていたり、ベッドに寝たきりになってお年寄りの方たちがいました。最初、私たちのダンスで騒がしくしても体調が大丈夫か心配していました。しかし、私たちが踊り始めるとニコニコしながら観てくれたので、踊っている私達もとても温かい気持ちになりました。寝たきりの方でも笑顔をみせてくれたので、誰かを元気づけることはとてもすてきでやり甲斐のあることなのだと思うことができました。そして、ダンス以外にも、自分たちにできることを考え、できる範囲内で笑顔を届けるということが、これからも大切だと気付きました。

また、私の母から聞いた介護の話について思ったことがあります。それは、現在、介護士さんの数がとても少なく大変だということです。人手が少ないと一人で請け負う仕事量が多く、母もすごく疲れてしまいます。少子高齢社会という問題においても、このままだと年金や健康保険制度を以前と同じようには続けていけなくなってしまう。少子高齢社会がこのままどんどん進んでいくと今の私達世代はもっと苦勞しなくてはならなくなるでしょう。この問題を解決するとともに、介護士の人手を増やすためにも、新たな若手の育成や、AIなども使った最新技術も必要になってくると思いました。

私の家族は母と姉と祖母と私の四人です。祖母は認知症になってしまっています。だから、家族みんなで家の仕事を分担して行っています。毎日それをこなすのは私も家族も大変です。けれども、以前はできなかった料理ができるようになったり、洗濯物がきれいにたためるよう

になったりと、そんな大変な状況の中でも得られたものがあります。前向きにそして、こうしたことをふまえて今後誰もが考えていかなければならないと思ったことがあります。それは、自分の家族の介護をやらざるを得なくなってしまうときに、どのように対応すればいいのかということ。介護についての知識が全くないので、そんなときが来たときと不安だらけになってしまうと思います。そのために、介護についての知識を誰でも少し得られるような機会があったらいいのではないかと思います。学校の授業の中に、もっと取り入れてほしいと思います。

現在でも、思った以上に自分の生活の周りに福祉や公的な支援制度というものがあるので、利用できることを知っておくと良いと思います。そして何十年後かの私になった未来では、今の問題が解決され誰もがよりよい暮らしができたらいなと思います。制度や技術だけでは人は十分に幸せだとは言えないと思います。そして、たくさんの方が幸せに暮らせるように、私にもできることをまず身の回りから探していこうと思います。



## 最優秀（高等学校生の部）

### 今の自分に問い返す

鹿島高等学校 一年

森 もり 田 た 有 ゆう 香 か

少子高齢化の進む現代の将来を担う私達には何ができるのか考えたことはありますか。今年から高校生となり、将来を見据えた各々の道への第一歩を決めていく必要がある今、改めて考えていかなければならないことがあります。

一つは、特定の物事だけに集中し過ぎずに様々なことに触れ、自分の可能性を広げていくことが大切だということです。私は将来、看護師の道に進みたい。そう思っていました。ですが、考え直す不安なことが増えていく一方でした。自分には合わない、他には何ができるのか分からない、と悩むことがありました。その時に見つけたのが「実際に医療現場へ行き自分の目で看護師などの仕事を見学する」というものでした。今回は定員やコロナ禍ということもありできませんでしたが、「医療」には様々な職業が携わっていること、そして将来的に目指していくための大事な知識を得る良い機会となりました。

もう一つは、今よりも周りに目を向けることです。私の近所には高齢の方や幼い子供が多く住んでいます。ですが、高齢の方々の中には、大変そうに歩く方もいます。私はお手伝いをして支えてあげたいと思う一方で、大丈夫だと言われてしまった時にどうすれば良いのかと考えてし

まい、行動に表すことができているように感じています。「将来、誰かを支える立場になる」という場面はこれから体験することだと思っていると、今のうちから少しずつ行動に表せるようにしていく必要があると考えました。また、高齢の方々や幼い子供だけでなく、目に見えない病と闘いながら生きる人々にも目を向け、自分にできることを見つけて増やし、可能にしていくことも意識していきたいと思います。

ここで話が変わりますが、病の治療を終えた人々が再び普通の生活へ戻れるようにするサポートを専門とした「理学療法士」、「言語聴覚士」そして「作業療法士」は、高齢社会において必要不可欠な職業になるのではないかと思います。分野ごとの専門的な知識で担当することで、個人に合ったりハビリプランを考えられ、より多くの人が普通の生活を送ることが可能になります。高齢の方々だけではなく、幼い子供、そして私たちにも必要不可欠だといえるのです。

これからの社会は、AI化が進むことにより、減少しつつある仕事も少なくはないと思います。ですが、「福祉」は人でなければ困難なことがあると私は思います。カルテなどの情報から適切なりハビリの方法を作り出したのは人であるのと同時に、関わっていくうちに知る新たな部分もまた、大切な情報となると感じます。

これらを将来へ繋げていくためにも、今の私たちは福祉の現状にも視点を向けていく必要があります。ですが、現代は少子高齢化に加え、環境問題にも直面しています。これらの問題は、短期間で解決できるものではなくありません。そして、福祉社会が充実・発展してきているもの、まだ不十分なところも少なくはないかと思えます。

私は、一人でも多くの人が自分らしく、普通の生活を送れるようになるために、病などで苦しむ人々を助けられる職業へ就くことを決めまし

た。今のままでは、まだ未熟な部分や不十分であることが沢山あるかと思えます。それを補うためにも、福祉体験やボランティアなどに参加するようにし、福祉への関心を深めていこうと思います。

## ボランティアと成長

鹿島高等学校 二年

内野 一騎

「ボランティアとは何のためにあるのだろうか」。今までボランティアというものをしたことがなかった私は、自発的に、そして無償で働くボランティアの必要性が分からなかった。そのような中、私はこの夏ボランティアを初めて経験することになった。その経緯はというと、私は調理部に所属している。その調理部では、年に一、二回地域のお寺で開かれるお母さんと子ども達との交流を深める祭のボランティアを行う。今年にはコロナ禍ということもあり開催が危ぶまれたが、主催者であるお母さん達の徹底した感染対策により、なんとか中止を免れることができた。

私は仲の良かった二人とともにボランティア活動に参加することを決意した。ボランティアの場所までは遠かったのですが、私達三人は電車に乗って行くことにした。ボランティア当日、夏真っ盛りということもあり、気温は優に三十度を超える暑さとなっていた。私達三人は駅から集合場所に着くまでの道で話し合っていた。「ボランティアって僕達に何かメリットなんてあるの」とか「こんな暑い日にすることじゃない」とか、暑さのせい私達の考えは沈んでいくばかりだった。しかし、会場に着くと私達の沈んだ考えは一蹴された。そこで私達が見たものは、暑いながらも生き生きと祭の準備をするお母さん達と、その周りでお母さ

ん達の手伝いをしている幼稚園にも入っていないような小さな子どもだった。私達がこんな思いでしているボランテアを、この人達はこんなに楽しんでいるのかと、自分に少し落胆した。そのような気持ちでボランテアを行うことは失礼だと思い、気持ちを仕切り直してボランテアを行っていると、一人の男の子が私に声をかけてくれた。

「おにいさんは何でこんなことしてるの。」

私はこの男の子がかけてくれた発言に、

「お兄さんはボランテアでやってるんだよ。」

と言ってしまった。そこで私は気付いた。ボランテアって小さい子には何のことだか分からないのではないか。いや、私もボランテアについて人に語れるほどの知識をもっているのだろうか、と。しかし時間が経つにつれ、そのような疑問は薄れていった。私は輪投げコーナーを担当していたのだが、なかには自分でやりたいと言いながら、いざ投げるとなると親に輪を渡す子どもや、何回も挑戦する子どもなど、とても様々な性格の子どもがいることを発見することができた。また、お寺の人やお母さん達はとても優しく、元気が満ちあふれていた。いっしょにボランテアに来ていた友達も、子ども達と仲良くなっていたり、お母さん達と世間話をしたりしていた。なんだかんだでボランテアの時間もあつという間に終わってしまった。最後にお母さんの一人の、「今日は本当に助かりました。この経験をこれからの生活に生かしてください」という言葉を聞いて自分の中で何か吹っ切れた気がした。ボランテアは、他人を助けるのが目的で行うものだと思うけれど、本当は自分を成長させるために存在しているものと気付いた。今日の大きな経験を糧にして、私はこれからもボランテアに取り組んでいこうと思う。自分を成長させるために。

## 優 秀 (小学生の部)

### 「バリアフリー」ってなあに

鉢形小学校 一年

城 内 史 也

ぼくは、「バリアフリー」ということばをしりませんでした。

それがきになったのは、なつやすみにかぞくで出かけ、トイレにいったときでした。トイレのつうろがひろくてたいらで、かべにはてずつめるぼうがついていることにきがつきました。ふつうのトイレとはべつに、おおきないりぐちのトイレもありました。

そのことを、おとうさんにきいてみたら、「バリアフリー」ということばがでてきました。

トイレのつうろは、からだのふじゆうなひとや、くるまいすのひとがつかいやすいようにひろくてたいらになっていること、かべについているぼうは「てすり」といって、てすりにつかまりながら、ころばずあんぜんにあるけるようにするためについていること、おおきいトイレは、あかちゃんのオムツをかえたり、からだのふじゆうなひとがつかつたりするのだと、わかりやすくおしえてくれました。

ぼくは、げんきでからだもじゆうにうごかせるけれど、からだかふじゆうなひとやおとしより、おなかにあかちゃんがいるひとたちには、トイレにいくことも、とてもたいへんなことなんだとわかりました。

そして、いろいろなひとがこまらないで、あんしんで、あんぜんにつ



かえて、えがおになることが「バリアフリー」なんだなとおもいました。はじめてのなつやすみに、とてもたいせつなことにきがつけてよかったです。これからは、こまっっているひとをみかけたら、

「だいじょうぶですか。」

「おてつだいすることはありますか。」

と、じぶんからこえをかけて、たすけてあげたいです。

## みんながえがおになるくらい

鉢形小学校 一年

平<sup>ひら</sup>野<sup>の</sup>香<sup>この</sup>乃<sup>のみ</sup>実

わたしは、みんながえがおになるために、こまっっている人がいたらしくせつにしてあげたいとおもっています。

ともだちがべんきようがむずかしくてこまっっていたときは、やりかたをおしえてあげました。ともだちは、

「ありがとうございます。」

と、えがおになり、わたしもうれしくなりました。

なっているともだちには、

「どうしたの。だいじょうぶ。」

と、こえをかけました。かなしいときはだれかがそばにいてくれたら、ひとりぼっちじゃないとおもえてえがおになるとおもいます。

おかあさんはいちようがわるくてねているときは、いつものえがおがありません。おかあさんがつらいことがわたしにもつたわってききました。だから、おなかをなでてあげました。そしたら、おかあさんがえがおになりました。わたしはとてもあんしんしました。わたしがおかあさ

んのおなかをなでてあたためてあげると、おかあさんはからだもころもあたたかくなるそうです。わたしもあたたかいきもちになって、えがおになりました。

しんせつにすると、みんなもわたしもえがおになります。

もし、こまっっている人がいることにだれもきがかないままでいたら、一人でずつとつらいおもいをしているかもしれない。

だからわたしは、まわりをよくみて、こまっっている人にきがつけるようにしたいです。そして、げんきになれるように、そばにいて力になってあげたいです。

たいせつなみんながえがおでくらせたら、とてもしあわせです。

## しんせつのバトン

高松小学校 二年

浦<sup>うら</sup>橋<sup>はし</sup>優<sup>ゆ</sup>和<sup>な</sup>

わたしには、おおばあがいます。おおばあは、ばあばのおかあさんで八十九さいです。

わたしは夏休み、おおばあとおきなわに行きました。けっこんしきがあつたからです。おおばあはとても元気です。でも、こしがまがつているので歩くのがとてもたいへんです。歩くときは、ほこうほじょぐかつえをつかっています。わたしはおきなわに行く前、ひこうきにのつたりたくさん歩いたりするので、おおばあは大じょうぶかなと、しんぱいしていました。でも、大じょうぶでした。それは、このおきなわりょうこで、たくさん人のやさしさを知ることができたからです。くうこうでは、あん内をする人がエレベーターがあるばしょをおしえてくれたり、

ひこうきをのりおりするときは、すこしのだんさのところも気をつけるようにおしえてくれたりしました。いろいろなところで、なん回もせきをゆずってもらいました。おおばあは、しんせつにしろらうたびに、「ありがとうございます。」と、おれいを言っていました。

おおばあといっしょに行ったりよこうで、わたしは、「しんせつにする」ことの大せつさを考えました。わたしは今まで、かぞくや友だち、先生、たくさんの人にやさしくしろらうてきました。でも、わたしは、じ分のまわりの人にやさしくできていたかなと思ひました。こまっているとき、かなしいときほどやさしくしろらうてくると、うれしくなります。そのときの気もちをわすれないようにして、これから生活していきたく思ひました。そして、やさしくしろらうてうれしかった、よかつただけでなく、しろらうたら、きちんとおれいを言うようにしていきたく思ひます。

## わたしの家ぞく

大同東小学校 二年

池田奈央

わたしの一ばん上のおにいちゃんは、びようきでしようがいがあります。いっしょに出かけたときに、大きな声でさけんたりするときがあつて、まわりの人からへんな目で見られることがあり、わたしはいやな気もちになります。

おにいちゃんは、一人でできることがすくないので、わたしの家ぞくはみんなできよう力しておにいちゃんのおせわをしています。おかあさ

んは、ごはんをたべさせてあげたり、おきがえをしてあげているので、わたしはおにいちゃんの学校のじゅんびを手つだつたり、おきがえをよいういしてあげたりしています。しようがいがあるおにいちゃんだけど、なにか手つだつてあげると、

「ありがとう。」

といつてくれるおにいちゃんが大好きです。じぶんの体がうまくうごかせなかつたり、うまくしゃべれなかつたりしておにいちゃんもきつとつらいだらうなと思ふことがあります。だから、わたしは、できることをすすんでやろうときめています。家ぞくみんながえがおでくらすることが一ばんうれしいからです。

この前テレビで、体のふじゆうな人がスポーツをがんばつていっているを見ました。すこしちがうところがあつても、みんなおなじように「ころ」をもっています。へんな目で見たりしないで、「やさしいころ」で見てもいいです。そして、みんながあつたかい気もちでくらすたらいいのと思つています。わたしはこまつている人や、しようがいがある人に、やさしく手だすけをしてあげられるようになりたいです。だから、しようらいは「かいごし」になつてたくさんの人をえがおにしたいです。

## 幸せな福祉

高松小学校 三年

豊田碧斗

ばくの祖父は今七十三歳で、ふだんだれかに助けられることなく生活することができています。祖父が自分の身体を自由に動かすことができない場合には、家族や周りの人たちの力をかりなければいけないと思ひ

ました。ぼくは、ごはんを食べさせてあげることができませんが、料理を作ったりお風呂に入れてあげたり、トイレにつれて行くことはできません。

そこで、かいごほけんの仕事をしている祖母に聞いてみたら「福祉」ということについて話してくれました。ぼくは最初、福祉とはしようがないのある人を手伝ったりすることだと思っていました。だけど、昔と今では考え方が変わってきているのだそうです。昔はお金をくばったり、病院でなおすことを考えていたけれど、今の考え方は幸せになるための材料が色々あって、それがみんなのそばにあることと考えられているのだそうです。

自分の考えていることを人におしつけるのではなく、その人のきぼうすることやその人にとって幸せだと思ふことを考えていかなければならないと思います。

たとえば、目の見えない人にあつたらいきなり手をひっぱるのではなくて、「ぼくに手伝えることはありませんか？」と声をかけたり、車いすに乗っている人にあつたらいきなり車いすをおすのではなく同じように声をかけてからお手伝いをしたいと思います。

もし、祖父が健康上の問題で身体が不自由になつてしまつたら、落としたものを拾つてあげたり困つていることを聞いて助けてあげたいと思います。今ぼくがしようがいのある人や高い者にできることは少ないけど、大きくなつてしよく業についたら、その人にあつた物を作つたりくふうしてあげることで幸せに過ごすことができるのだなと思ひました。

## ボランテニアでまちをきれいに

中野東小学校 三年

秋<sup>あき</sup>田<sup>た</sup>陽<sup>よう</sup>亮<sup>すけ</sup>

ぼくは、六さいからボーイスカウトに入っています。ボーイスカウトの活動で、毎年五月に、神栖中央公園の花植えに参加しています。ピンクやむらさき、黄色の色とりどりの花を公園の入り口にみんなで一列にならんで植えます。あつという間にかわいい花だんが出来上がります。花だんの前を通るたびに、「ぼくが植えた花は、元氣かな」と見るのが楽しみです。

かしまのヤマダ電機の入り口の道路のわきにも同じ花がさいいました。きつとこの花もだれかが植えてくれたのだと思うと、心が温かくなりました。

六月には、「みんなの海をきれいに」海岸清掃をします。日川浜のごみ拾いをしました。空きかんやペットボトル、長いひもや短いひもを拾いました。こんなにもいろいろなごみが落ちていることにおどろきました。かんきょうしょうの調べによると、毎年、海に流出するプラスチックごみのうち、二から六万トンが日本から発生した物だそうです。二〇五〇年の海は、魚よりもごみのりようが多くなると言われるほどしんこくな問題になっているそうです。一人ひとりのごみをへらすいしきや行動が海の未来を守るとされています。ぼくにできることは、小さいことだけれど、みんなといっしょにごみ拾いを続けていくことだと思います。

今年の海の日には家族で海に行きました。天気もよくて暑い日だった

ので海に入るのが気持ちよかったです。人もたくさんいました。ぼくは、砂の山づくりをしました。三百六十度どこからでも見る事ができる大きな山ができました。砂はまにはプラスチックのごみなどがなかったの、大きな山も作ることができたし、とても楽しく遊べました。ぼくは遊びながら、「ごみひろいをしているからごみがへっているのかもいけない」と思いうれしくなりました。だけど、帰りに車にのるときにガラスびんのはへんが砂浜に落ちていておどろきました。はだしだったのでがをしてしまうところでした。ごみがへっていると聞いたのに少しがっかりしてしまいました。

ぼくは、まちや海が生き物や人間が安全に楽しめる場所になってほしいと思っています。だからこれからもぼくはボランティアをつづけていきます。

## しょうがいのある妹

中野東小学校 四年

小<sup>お</sup>澤<sup>ざわ</sup>海<sup>かい</sup>音<sup>と</sup>

ぼくには二人の妹がいます。二才になる妹は、医りよウ的ケア児です。気かん切開をして、そこに気かん力ニューレを入れて人工こきゅうきをつないでいます。ミルクも口からではなく、いろいろというおなかにあなを開けて、チューブを通して、いに直せつミルクを流しています。立つことも歩くこともできません。

妹は、生まれた次の日にきゆう急車でNICUのある病院に運ばれました。入院したことを知った時、ぼくは悲しかったです。コロナかで、お父さんとお母さん以外は面会できませんでした。お父さん、お母さん

から妹の話を聞きたびに、ぼくはまだ会ったことのない妹に会いたくてしかたなかったです。そんな時に、妹のたんだの先生が特別に面会させてくれました。初めて妹を見た時、ちいさくて、かわいくて、やっと会えてうれしくて泣きそうになりました。だっこした時、チューブが付いていてこわかったけれど、あたたかくて、やわらかくて、ミルクのおいがしました。

妹の退院の話が出た時、とてもうれしかったです。お母さんの話では、退院について、ほう問かんごのかんごしさん、地いきの保健しさん、近くの調ざい薬局の人、NICUのかんごしさん、妹の主治医の先生が集まって、妹が退院してからのことを話し合っていたそうです。たくさんの人たちのサポートがあつて、妹はお家に帰って来ました。

最初は、機かいがたくさん妹のまわりにあつてびっくりしました。機かいのアラーム音が鳴るたびに、妹に何かあつたのかと思つてこわくなつていました。退院して一年たつた今、ぼくはアラーム音の鳴る意味を知つて、こわくなくなりました。少しずつ妹のお世話もできるようになりました。口びるがすぐかわいてしまうので、リップクリームをぬつたり、妹がさみしくないようになりで一緒に遊んだり、ゴロゴロしたりしています。週に五日は、ほう問かんごのかんごしさんがおふろに入れてくれたり、体調をみてくれたり、遊んだりしてくれます。妹だけではなく、ぼくやもう一人の妹にも話を聞いてくれます。二ヶ月に一回、地いきの保健しさんが妹の体重や身長を計つてくれます。妹の体重がふえていたり、身長がのびていたりするとうれしくなります。

妹が帰つて来て、毎日楽しくすごせているのは、たくさんの人たちに支えてもらっているからです。ぼくもこまつている人がいたら助けてあげられる人になりたいです。それとすなおに「ありがとう」と言える人

になりたいです。

今の目ひようは、妹を一人でだっこしてあげることです。そのために体力をつける練習をして、一人でだっこできるようになりたいです。

## 言葉は大切

中野西小学校 四年

佐藤 隼さとう はやと

ぼくは、毎日テレビでニュースを見てみると、小さい子どもが親にぎゃくたいの事けんでなぐられ死亡、と暗いニュースが多く、なみだがでるほど悲しい気持ちになりました。

今年の夏休み、ぼくはイライラすることが多く、ゲームの時間を決められたり、母におこられるとぼくは、小さい声で「うるさい」「死ぬ」など悪い言葉を言ってしまう母に聞こえてしまいおこられました。

「死ぬとかかんとんに口にしたらいけないんだよ。」

と母がこわい顔で言いました。ぼくは、ひどい言葉を言ってしまったと心の中で思いました。母とぼくがイライラするようにならないためにはどうすれば良いか考えました。一年生の道徳で、フワフワ言葉は人の心がポカポカする言葉で、チクチク言葉は人の心が悲しい言葉だと思いだし、今ぼくは、チクチク言葉をつかってしまっていると反省しました。

「死ぬ」「消えろ」などの言葉は時に相手の心にするどいなもののようになってきずつけることもあるので、言っではいけない言葉だと気付きました。今までそんなことを考えたことがなかったから、考える時間ができて良かったです。

おじいちゃん七十三才とおばあちゃん六十九才は、いつも元気でぼく

達に元気な力をくれます。おぼんに家族でおじいちゃんの家にとまりに行った時、おばあちゃんが急に体調が悪くなり、だいじょうぶか心配になりました。ぼくは、おばあちゃんのをさすってあげました。その時おばあちゃんは、小さい声で「ありがとう」と言ってくれてぼくはうれしかったです。おじいちゃんは、畑仕事が好きでやさいと米を作っています。だけど最近、重い物を持つと心ぞうがくるしくなるので、三十キロの米を母と二人で家の中に運びました。いつもおじいちゃんは、こんな重い物を一人で持っていたんだなと思い、ぼくにできることを手伝ってあげれば良かったと思いました。ぼくは、一緒にいる時は、重い物をもってあげたり畑仕事を手伝ったり、かたたたきやしよぎを一緒にやったりたくさんお手伝いをしたいです。二人はどんな時も思いやりの心を持ち、やさしい笑顔で「ありがとう」とす直に言えてすごいと思いました。ぼくもそんな人になりたいです。

ぼくの言葉の使い方人を幸せにもするし、きずつけたりするのでぼくは幸せにする言葉を使うようにしたいです。

小さいころから家族みんなが教えてくれた「ごめんなさい」と「ありがとう」の言葉が大切だと気付きました。身長は大きくなったが心が小さくなったと反省し、これからは人を思いやる気持ちをもって助け合うことは、生きていく中で大切だと心から思いました。そして、思いが行動になっていくことが幸せになると思います。ぼくにとって大切なことを教えてくれた夏になりました。

# 私の宝物

三笠小学校 五年

笹沼華梨

私の宝物は、ねえねえからもらった手紙です。私には、高校二年生のねえねえがいます。ねえねえは、生まれつき首に「側けいのうほう」という病気で、体温が上がったり、季節があたたかくなってきたりしたら、小さな穴からうみが出ていました。高校一年生の時に、大きくはれて、うみが止まらなくなり痛みもあり、水分をとることもご飯を食べることも困なんになってしまいました。何度も土浦の大きい病院に行つて、たくさん検査や治りようをしましたが、良くならず反対にどんどん悪くなっていきました。

夜、こきゅうがおかしくなつてしまったので夜間外来に土浦の病院まで行きました。夜間外来の先生もビックリするくらい、悪くなつてしまつていたようで、きん急入院することになりました。一週間ぐらい入院をして退院しましたが、手術をしなくてはいけなくなり一週間後にまた入院してしまいました。

私はいつも側にいるねえねえが居ないことが、とてもさみしくて、悲しくて毎日泣いていました。私の泣いている姿を見て、ママが、

「コロナの関係で、病室に行くことも、会うこともできないけど、同じ建物にいただけでも安心するなら着替えを持って行くときに一緒に行く？」

と言ってくれました。私は、「行きたい。」

と言いました。ママが着替えを持って行っている間、私は待合室に行つてそのまま帰るだけでしたが、それでもねえねえが近くにいるんだと思うと安心しました。でも、帰るときさみしくて車の中で泣いてしまいました。その姿をママがねえねえに話をしてくれて、ねえねえが手紙を書いてくれました。すぐうれしくてすぐ手紙を読みました。涙が止まらなくなり帰り道ずっと泣いていました。

その手紙の内容の中に、お手紙の交かんをやろうと書いてあり、いつも私の心によりそつてやさしい言葉、私を元気にしてくれる言葉が書いてありました。私はねえねえをばげましたけど、反対にたくさんはげまされました。そして手紙交かんは退院するまで続きました。

今ねえねえは、自分のしよ来の夢を実現させるため、たくさん勉強しています。そのしよ来とは、誰かの心によりそえる人になりたい、そんな仕事につくため、りんしよ心理士を目指しています。この夢は、すぐねえねえに合っている仕事だと思います。

ねえねえからお手紙を通して、大切なことを教えてもらいました。お手紙でも、誰かの心によりそえることができるということ。

私は、お手紙交かんした手紙を「私の宝物」として大切にします。

## 私ができること

鉢形小学校 五年

大竹霽羽

私には、三つ下の妹がいる。妹はかわいい。かわいいけれど、わがままで、好き放題やつていて、よく笑つて、よく泣いている。私は妹と一緒にいることが多い。だから、妹が考えていることがよく分かるし、妹

も私のことをよく分かっている。分かっているからケンカにならないと思うのに、分かってしまうからよくケンカをしてしまう。でも妹はかわいしいし、ずっと一緒にいたいと思える大切なそんな存在だ。

そんな妹は、私が困っていると、

「どう、ダメそう。」

と聞いてくる。母は、

「大丈夫。」

と聞いてくる。大丈夫と聞かれると、私は、

「うん。」

と言ってしまう。でも本当は、大丈夫ではないのだ。妹からダメそうと言われると、「ダメなの」と答えることができる。けれど、母の聞き方だと「うん、大丈夫」と答えてしまい、失敗して、おこられてしまう。母にこの話をしたら、母は妹に、

「どうしてそんな聞き方をしているの。」

と聞いていた。妹は、

「みおはは、大丈夫って聞かれると、うんって言っちゃうんだよね。」

と言っていた。

「あーちゃん（妹）とみおはの絆には、かなわないわ。お母さんの思いやりがちよつと足りなかったね。ごめん、ごめん。」

と言っていた。

私は、自分から話かけることが苦手だ。声をかけたたくても、きん張してしまふ。そんなとき、いつも妹は声をかけてくれる。私も妹のように相手を思いやった声かけができれば、多くの方がより安心して生活することができるとも思えないと思つた。そこで、私ができるかな目標を二つ立てた。

一つ目は、自分から声をかけることだ。でも、知らない人に声をかけることはむずかしい。だから、友達から始めてみる。まずは、その友達のことをよく知る。そして、妹のように相手を思いやり、返事をしやすく、助けを求めやすい声かけをしていきたい。

二つ目は、自分から助けを求めることだ。私は、困ったときに強がってしまう。けれど、困っていることを相手に伝えた方が、みんなも私に声をかけやすくなると思う。だから困った時は自分から勇気を出して「助けて」と言えるようにしたい。

私が、できそうなことを取り組んでいくことで、身近な人がより安心して、笑ってくらするのではないかと思う。

## 小さななみばとさん

波野小学校 六年

植うえ木き蒼そう太た郎ろう

ぼくたちの住む地域には「なみばとさん」とよばれる、登下校中の安全を見守ってくれている方たちがいます。ぼくたちも一、二年生のころは、なみばとさんに下校のときにもお世話になりました。

なみばとさんは、下校するときに、いっしょに帰ってくれて、横断歩道の安全なわたり方を教えてくれたり、車が来るときに、はじに寄るように声をかけてくれたり、ぼくたちが安全に帰れるように身守ってくれています。また、家の近くまでいっしょに来てくれるので、下校中から分かれて一人になってしまつても、なみばとさんがいると思うととても心強かつたことを覚えています。

ぼくは、今、六年生になったので、なみばとさんといっしょに帰るこ

とはなくなりましたが、横断歩道のところに立っていて、ぼくたちがわたるときに、なみばとさんは笑顔で、

「いってらっしゃい。」

と、声をかけてくれます。なみばとさんに声をかけてもらおうとぼくも明るい気持ちになって、

「おはようございます。」

「いってきます。」

と、あいさつを返します。ぼくはなみばとさんたちとあいさつをかわすことで、「今日も一日がんばろう」という気持ちになります。だからこれからも、たくさんの人にあいさつをしていきたいと思います。

ぼくは、高学年になって、登校班の班長になりました。初めは、下級生の安全を守るか不安でした。しかし、下級生と安全に登下校するために、なみばとさんが教えてくれたことや、やさしい言葉かけを思い出して、下級生たちが、安心して登下校ができるようにしています。

ぼくは、なみばとさんとは、あいさつをしています。地域の人には、あいさつができないことがあります。それは、「知らない人にあいさつをするのがはずかしい」とか、「無視されたらどうしよう」という不安な気持ちがあるからです。でもなみばとさんを見ると、だれにでも、自分からあいさつをしていることが分かります。あいさつをされれば、明るい気持ちになります。今まで知らなかった人ともあいさつをすることで、顔見知りになったり、なかよくなったりできるかもしれません。あいさつをする人が増えることで、その地域も、明るくなり顔見知りの人が増えると、みんなに見守られているような気持ちになります。登下校をやさしく見守ってくれたなみばとさんたちのような人が地域にもっと増えると安全に、安心して登下校ができると思います。ぼく

も、下級生たちをやさしく見守る、小さななみばとさんのような存在になって、下級生たちに道路の歩き方や、なみばとさんから教わったことを教えていきたいと思います。

## 理想のかい護

豊津小学校 六年

山<sup>やま</sup>町<sup>まち</sup>彩<sup>さい</sup>奈<sup>な</sup>

私が思う福祉活動は、病気をもっていたり、体の不自由なおじいさんやおばあさん、また、かい護をする人たちが、当り前に、楽しく笑顔で過ごせるような町に少しずつしていくことです。

私の、おばあちゃんは、毎日休むことなく、ひいおじいちゃんのかい護をしていました。おばあちゃんは、とてもやさしくて、私と、お姉ちゃんたちが来て、おとまりなどをしても、いやな顔一つせず、かい護もこなして私たち姉妹のごはんも作ってくれていました。また、ひいおじいちゃんも、ささいなことだけど、感謝の気持ちを忘れずに、笑顔で過ごしていました。例えば、おばあちゃんがひいおじいちゃんのごはんを作って、ひいおじいちゃんの前に、ごはんを出すと、ひいおじいちゃんが、おばあちゃんに、いつもにつこりした顔で、

「感謝、感謝。」

と言います。わたしが、感謝の気持ちを伝える時は、

「ありがとう。」

としか言えません。ひいおじいちゃんは、天国に行ってしまったけれど、天国に行くまでは、おばあちゃんが、やさしくひいおじいちゃんに接して、ひいおじいちゃんは、それに対して、どんなささいなことでも



感謝する。これが、あったから、笑顔が絶えない日々を過ごせたと思います。だから、これが私の理想のかい護です。

みんながみんな笑顔でかい護したり、されたりできる人ばかりじゃありません。最悪な場合、だれにもかい護してもらえないまま、亡くなってしまうケースがあると聞いたことがあります。私はそのような経験があると聞いたことが一回だけあります。それは、わたしが五年生の時に、お姉ちゃんと、お父さんが会ったおじいさんのことです。そのおじいさんは、シヨツピングモールにいて、ゆかにすわって、三十分くらいしても立たなかつたので声をかけると、何かの病気だつたそうです。そして、お父さんが、かい護してくれる人がいるか聞くと、おじいさんは、「いない。」

と言いました。その後、おじいさんの息子さんに電話したら、いまは、遠いところにいると言つたみたいです。

このように、かい護してもらえない人もいれば、かい護されない人も、おじいさんの他にもいると思います。そんな人のためにも、私は、病気をもつていたり、体の不自由なおじいさんやおばあさん、また、かい護をする人たちが、楽しく過ごせるような町にしていきたいと思ひました。かい護するのが大変なことは分かるけれど、もし、お父さんやお母さんのかい護が必要になつたら、私のおばあちゃんのように、笑顔でかい護したいと思ひました。



## 優 秀 (中学生の部)

### いつか言葉の壁をこえて

鹿島高等学校附属中学校 一年

鈴<sup>すず</sup>木<sup>き</sup>結<sup>ゆ</sup>衣<sup>い</sup>

小学生の頃だつた。昼休み、友達と昨日に見たテレビ番組について話をしてた。その番組の内容は、手足を失つた方や車いすに乗つた方が登山や車いすバスケットボールなど、様々なことに挑戦する主旨のもだつた。その時、友達がこう言つた。

「障がいがあるのつてかわいそうだよ。それでも普通に私達と同じようにうなことができてすごかつたな。」

私は返す言葉に詰まつてしまつた。友達が言つた「かわいそう、すごい。普通」という言葉が心に引つかなかつてしまつたのだ。

障がい者に対して「かわいそう、普通とは違う」という言葉をよく聞く。特に私は「かわいそう」という言葉が客観的で苦手だ。「かわいそう」という人ほど同情しているつもりで障がい者のことを何も分かつていない気がしてしまう。障がい者の方は「かわいそう、すごい」と言われてどう感じるのだろう。嬉しいとは思わないのではないだろうか。

私の祖父は脳梗塞を二回患つたため、今でも言語障がい<sup>い</sup>に苦しんでいる。「暑い」と感じて「寒い」と言葉に表してしまつたり、自分の言いたいことをうまく伝えられなかつたりして、イライラしてしまうこともある。さらに、私の名前を飼っている犬の名前と間違えて呼んでしま

うこともあった。また、祖父は他にも様々な病気を患っているため、今でも定期的に通院している。朝・昼・晩と食後にたくさん薬も飲んでる。最近足が痛むらしく、外出する際はつえを使って歩いている。私がまだ幼稚園に通っている頃、祖父の通院に同行したことがあった。祖父が主治医の先生に自分の症状を伝える時も、うまく伝えられずつかえつつかえ話していたが、先生はいやな顔ひとつせず必死に耳をかたむけて相づちを打ちながら聞いていた。看護師の方やリハビリをしてくださる言語療法士の方も笑顔で同じように対応していた。医療関係者の方々は患者に対し「かわいそう」という感情をもって接しているのではなく、患者と同じ立場に立ち全力をつくしていると感じられた。そんな先生方がいるから祖父は長年の通院も苦ではないのだろうと思う。私も祖父が言いたいことをうまく伝えられなくても、先生方のように耳をかたむけて寄りそえるようになりたい。

このような体験を通して私は障がいのある方と関わる際、見た目や偏見で判断せず、障がいについて正しく理解することが必要だと思った。もちろん、病院の先生のように初めて会った人の障がいをすぐに判断し、的確にフォローできる訳ではない。そして、中学生である私にはできないことが限られている。しかし本やインターネットで障がいや病気について調べたり、困っている方を見かけたりしたら「お手伝いできることはありますか？」と積極的に話しかけたい。障がいや病気の有無に関わらずどんな人に対しても手を差しのべられる心を持ちたい。健康に暮らせることに感謝して、生活したい。このようなささいなことが、誰にでもできる優しい寄りそい方だと思う。

一人一人の顔や声が違うように、障がいがあることは特別なことでもかわいそうなことでもなく、個性のような誰もがもっているものだと考

えている。みんな違うのだから「普通」と「普通ではない」なんていうものはなく、みんな「同じじゃない」になるのではないのだろうか。いつか「障がい者」という言葉がなくなり、一人の人間として助け合いながら生活できる世の中になればと願う。

## 「大丈夫」を聞き逃さないこと

鹿島高等学校附属中学校 一年

林 はやし 由 ゆ 結 い

「大丈夫」。この一言は、生活する上でよく耳にする言葉だと思えます。例えば、人を安心させる時や実際に問題がなかった時などが挙げられます。けれどこの一言に、本心を隠してしまう人がいることを知ってほしいです。

私達は今、急激に心と体に変化していて、ささいなことでも今まで以上にイライラしたり、落ち込んだりしてしまいます。けれど、たまつたストレスや心の中に押し込んでしまった暗い感情をどうすればいいのかわからず、当てつけのように反抗したり自分を責め続けてしまったりします。そうなってしまう前によくあることが、何を聞かれても「大丈夫」と答えることです。何か不安なことはないか、大丈夫なのかと聞かれてしまうと、自分でも整理のできない感情があふれそうになってしまいい、それを防ぐために「大丈夫」をくり返してしまうのです。だから、「大丈夫」という言葉に注目する、ということは子供の不安定さにはやく気付くことにつながっているのです。

では、どうしたら「大丈夫」という言葉を意識できるのでしょうか。簡単な話です。学校と家庭で週に一回、もしくは月に一回でも最近のこ

とを聞いてあげればいいのです。そこでは、家族との関係や学校で起こったことなどの話を興味をもって聞き出します。その時「大丈夫」や「特に問題はない」などといった具体的なないあまいな回答をした場合、「何かあるのだろうか」と気にかけてみる。この一連の行動で、今辛い思いをしている子を見つけて出すことができると思います。そうすれば、その人に合った向き合い方ができるし、何より「一人ではない」という安心感是不安やイライラを和らげてくれます。

また、学校と家庭が同じタイミングで聞き出すのは逆効果です。学校で色々話し、疲れている状態で家でも聞いたただしてしまうと、うとうとした気持ちで勝つてしまい、きちんと話すことができなくなるからです。さらに、悲しい、寂しいという感情はなかなか素直に話すことができませぬ。「親にめいわくをかけたくない」、「かつこ悪いから話したくない」と思い、心の中で押し殺してしまうことも少なくないと思います。だから、家では兄弟が多かったり仕事が忙しかったりしても、きちんとその人のことを見て、向き合つてあげてほしいです。それが不安を取り除く一番の方法であると思つています。

しかし、家や学校がどれだけ向き合つても何も話してくれない場合もあると思います。そういう場合は、家で同じ時間を共有してみてください。興味をもつていること、楽しそうに行つていゝもの。それらを知つて、一緒に楽しんでもらえるだけでも、心が楽になります。「自分と一緒にやつたところで、楽しくないだろうから」と決めつける前に、まずは「これはどういゝものなの？」と聞いて、話すきっかけにしてみてください。きつと、新しい発見があると思います。

このように、「大丈夫」の一言を聞き逃さないことは不安や悲しい、寂しいといった感情に、いちはやく気付いてあげられるだけでなく、家

庭での新たなコミュニケーションの形がうまれると思います。また、様々な場所で真剣に向き合つてもらふことで話しやすくなることも多くあります。「様子が変だな」と感じる前に不安の芽をつみとつてあげる必要があると思います。一回五分から始められるこの対策を、ぜひ行つてみてほしいです。

## ありのまままで

平井中学校 二年

植<sup>うえ</sup>田<sup>た</sup>美<sup>み</sup>結<sup>ゆ</sup>

私が思う「みんながえがおになるくらい」とは「ありのまま」でいることだと思ひます。

私は、テレビで「いししいさん家」といふノンフィクションの話を観ました。「いししいさん家」とは「誰もがありのままに過ごせる場所を」との理想を掲げ、約十六年前に石井英寿さんが立ち上げた介護施設です。ここでは、問題行動などを理由に他の施設から断られた方たちを受け入れていゝます。石井さんは大学卒業後、大手の介護施設で働いていゝましたが、規則や時間割で利用者を縛るやり方に疑問をもち「いろいろな人がいゝいゝ」ありのままがいい」といふ場所を作つたそうです。利用者やその家族は本当にありがたいだろうなと思ひました。

テレビでは、認知症の女性を取材していゝました。女性は口調が強くなり、スタッフの腕を強くつかんだり、手をつねつたりしていゝました。認知症によつて脳の感情を抑制する部分があまく働かず、感情が爆発して暴言や暴力といった行動をとつてしまふことがあるようです。私はこのことを今回初めて学びました。スタッフの手などには、生傷がたえませ

ん。スタッフは傷を負いながらも「つらいけれどやらなきゃならない」と言い、笑顔で介護したり話しかけたりしていました。なかなか簡単にできることではないと尊敬しました。しかし、問題はこれだけではありません。

統合失調症の男性も「いしいさん家」に通っています。統合失調症とは、感じ方や考え方、行動をまとめることがうまくいかなくなってしまう病気です。そんな男性Yさんは、スタッフにもっと話を聞いてほしいと不満が溜まっていました。しかし、スタッフも他の利用者の介護があります。Yさんは自分に一人スタッフをつけてほしいと要求し始め、大きな負担になっていきます。そしてついにスタッフのひとりにけがをさせてしまいました。とても痛々しいあざでした。Yさんがスタッフに手を上げてしまったことから、スタッフ達と石井さんと話し合いが行われ、その結果五人が「いしいさん家」を去ることになりました。スタッフ達も石井さんの理想が分かっているからこそ言うに言えない不満が溜まっていったのです。石井さんは、一人ですつと夜勤もこなしながら孤立していきました。一方Yさんも、家族とも、唯一の居場所の「いしいさん家」とも、孤立し八方ふさがりになってしまいました。観ている私もハラハラしましたが、石井さんの奥さんの力も借り、スタッフ全員と再び話し合いの場を作ります。活発に意見交換が行われ、「いしいさん家」の目標を再確認します。そしてもうひとつ、石井さんはYさんのことをまた受け入れたい、と話します。スタッフは動揺しますが、後に意外な提案が出されました。介護経験があるYさんをボランティアとして来てもらうという案です。Yさんは戸惑い、初めは全くうまくいきませんが、石井さんの「どんな人でも取りこぼさない」という熱くあたたかい思いが彼に伝わり、そつと涙を拭っていました。それからYさんが

変わり、自分から話しかけたり、手伝ったりする姿が見られるようになりました。また、新しく介護経験豊富なスタッフも加わり、石井さんも周りの意見を取り入れやすくして良い方向に向かっていきました。石井さんには多くのことを学びました。特に「人って周りの環境次第で、輝けるか沈むか」という言葉には胸が熱くなりました。時々うまくいかず悩むこともあります。自分も、そして周りの人も笑顔で暮らしていけるように努力していきたいです。

## あの経験を生かして

大野中学校 二年

武内 一まち

今年の二月初め、私の祖父は病院に入院しました。病名は、間質肺炎でした。この病気は、国の難病に指定されています。入院してから、私達家族は、祖父母を支えました。現在、新型コロナウイルス感染症の影響で、面会を制限されています。私は面会に行けないので、最近の写真や手紙を書き、持っていてもらいました。父や母は、祖母を病院まで送っていました。そのような支えがあり、祖父は元気をとり戻しつつありました。しかし、父と兄が面会に行った時の様子は、酸素呼吸器をつけ、弱々しかったと言っていました。その報からちょうど一か月後、病院から連絡があり、すぐにかかけました。しばらくして、天国へと旅立ったと聞きました。私は、この経験を通して学んだことや思ったことが二つあります。

第一に、命の大切さを学ぶことができました。「人が亡くなる」ということが初めてだったので、とても怖かったです。その分、命の大切さ

や重みというものを感じることができたとあります。また、「祖父」という身近な人が亡くなり、家族や友達と過ごす時間を大切にしていると思います。

第二に、命は温かいということですが、病院で祖父としばらくしてから会えました。額をさわると、少し汗ばんでいたけど、ほんのりと温かかったです。ついさつきまで生きていたということがはつきりと分かりました。

私の祖母は元々、祖父と同居していました。だから、今は一人で生活しています。そこで、一人で生活している時と二人で生活している時の良いことや大変なことを聞きました。

まず、一人暮らしの良いところは、自由な生活を送れるところです。

趣味や運動など、様々なことができるからだそうです。しかし、食事には気をつけないといけません。反対に大変なことは、体調を崩した時です。家の中に人がいないと、不安な気持ちになりますし、助けてくれる人がいないと大変だからだそうです。

次に、二人暮らしについてです。良いところは、互いに助け合いをしながら生活できることです。体調を崩した時にサポートをしてくれると、とても安心するからだそうです。大変なことは、二人で生活する中で、相手の嫌な部分が見えてしまうことだそうです。

私は、祖母の思っていることを基に、これからどう祖母を支えるかを考えました。

まず、体調を崩した時にどう支えるかです。祖母は、スマートフォンを持っていきます。そのスマートフォンを活用して助けを呼び、すぐにかけつけられるようにする必要があります。

次に、祖母の家の環境を整えることです。最近では、不審者が増え、

被害も増えています。玄関や、窓などを防犯対策で備えておく必要があります。

私が大人になった時の日本は、「少子高齢化」が進んでいると聞きました。これから高齢者が増えていく中、その人達を支えていくのは、私達です。また、高齢者を支えるには、会話や関わる時間を増やしていく必要があります。その支えで笑顔になる人が増えれば良いと思います。今回、祖父が亡くなるという経験をして、たくさんのことを学ぶことができました。その経験を生かし、自分にできる「支える」は何かを考え、思いやりのある人になりたいと思います。

## 少子高齢化問題について

鹿野中学校 三年

宮崎 湧

みなさんは高齢者の人口が年々増加していることを知っていますか。そのため少子高齢化が一つの社会問題となっています。自分は関係ないと思っている方も多いと思います。

しかし高齢者のことを考えるということはとても大切なことだと私は思いました。関係ないと思っている方も自分が高齢者になった時の社会はどうあるべきかしつかり考えるべきだと思います。

私の通っていた小学校は全校生徒が五十人の小さい学校でした。そのため、地域との交流も多く、運動会も地域ふれあい運動会という形で行っていました。おばあちゃん、おじいちゃんとの関わりも多く、様々な面で支えてもらいました。一方私の登校班も、現在は他の登校班と合併する形になりました。そこで改めて少子化が進んでいることが分かり

ました。朝、自転車で登校する際、「いつてらっしゃい」と言ってくれるのも地域のおばあちゃん、おじいちゃんです。私は、このように地域と関わっているうちに、少子高齢化を実感するようになりました。

少子高齢化になると日本はどのような問題を抱えるでしょうか。経済活動は労働力人口に左右されますが、人口急減、超高齢化に向けた現状の流れが継続していくと、労働力人口は加速度的に減少していきます。市区町村毎に人口動向を地域ごとの出生率で見ると、急速に低下していきます。超高齢化社会になると、地方圏を中心に四分の一以上の自治体で行政機能をこれまで通りに維持していくことが困難になる可能性があります。

また、少子化への取り組みとして沢山の課題があることが分かりました。子育ての支援施策を一層充実させ、若い年齢での結婚・出産の実現、多子世帯への一層の配慮、男女の働き方改革など、地域の実情に即した取組強化が必要です。これらの課題に対して、各段階に応じた経済的・社会的支援をするため、社会全体で行動し、推進していることが分かりました。

高齢化への取り組み、対策としては就業・所得・健康・福祉・学習・社会参加・生活環境・研究開発・国際社会への貢献などすべての世代の活動推進の六つの分野に分けて取り組んでいることも分かりました。

高齢者の一人暮らしも問題の一つだと思います。寂しい思いをしている人もいれば、家族に迷惑をかけたくないと思っている人もいます。そのような高齢者の方の複雑な気持ちを誰にも伝えられないことも問題があります。そのため、デイサービスやお年寄りの方が気軽に会話できるそのような場を増やすべきだと思います。

このように高齢者がたくさん増えていく中で、住みやすい環境や社会

をつくっていくことが、今の若者にある仕事ではないのでしょうか。今、大切なのは身のまわりにいる高齢者の方々のことを考えることだと思います。今いる高齢者の方は、日本経済を支え、日本の発展に貢献してきた人たちです。だから私たちは、感謝の気持ちを伝えながら接することが大切だと思います。それが将来の超高齢化社会を迎える社会全体の考え方の基本となり、指針になっていくと思います。今、私たちがすべきことは、高齢者の住みよい社会、環境をつくり、高齢者と親しく接して、学ぶべきことは学び、共に支え合い、地域や社会全体で、一つのコミュニティとして、共に生きていくべきだと思います。私は今回、高齢者の考え方、見方を大きく変えました。

自分達や、自分の両親が高齢者になった時は、高齢者と共に暮らせる世の中になつていくように今できることをすぐにやるということが私達若い世代と高齢者が一緒に歩むべき唯一の正しい道だと思います。

## きっかけ一つで

大野中学校 三年

工藤美寛

「目の不自由な方へ、音の出る信号機を」。

スマートフォンから聞こえてきたのはこのキャッチコピーを掲げたチャリティーラジオだった。私はなぜだかこのラジオに興味をもった。

音の出る信号機とは、視覚障がい者の気持ちとは、そんなこと分らなかったし、正直考えたこともなかった。ではなんでこのラジオに興味をもったのか。それは目の不自由な子供達に向けて言った、ラジオパーソナリティの一言が心に残ったからだ。「たとえ僕のことを見ることがで

きなくたって、僕にとって君達は大切な友達だよ」。その言葉を聞いた瞬間に私ははっとした。自分は知らないうちにまるで他人事のように障がい者について考えてしまっていたのだ。決して他人事ではない。私達は健常者だからといって障がい者のことを遠い存在だと思っはいけないのだと気づかされた。そしてそれと同時に障がい者のことを社会全体で考えることで、より助け合い、支え合える世の中になるのではないかと思つた。

私は小学生のころ、視覚障がい者体験をしたことがある。アイマスクをつけて行つたそれは、大きな不安と強い恐怖を私に覚えさせた。いつも当たり前のように歩くときは目で障害物や行きたい場所を判断する。けれどそれができないのだ。視覚障がい者は毎日こんな恐怖と戦いながら生きているのかと、痛いほど感じた。また、そこで教えてくれた先生が私達に言つた言葉を、今でも覚えている。「目が不自由な人にとつて町で歩くときは、点字ブロックのほかに、音の出る信号機も頼りにしています」。音の出る信号機。ラジオでも言つていたこの言葉に私は興味をもち、インターネットで調べた。すると、音の出る信号機は日本に約二万基が設置されていることがわかつた。一見多いようにも感じられるが一般的な信号機と比べるとそれは、十分の程度にすぎなかつた。このままでは、視覚障がい者が安心して暮らせる、完全なバリアフリーの世の中ではないと感じた。ではどうすればよいか。もちろん、私達が音の出る信号機を設置できるはずがない。そこで考えたのが募金だ。一円でも募金することでいずれその一円が社会を変えるかもしれない。私達には何もできない、ではなく、私達にしかできない何かを実現すること、やがて世の中は障がい者でも住みやすい、バリアフリーな環境になつていくだろう。

ラジオを聞いて障がい者に対しての見方が変わり、体験を通して自分ができる何かを探すようになった。このように人間は、きっかけさえあればいくらだつて自分を変えられる。きっかけを見つけ、人のために行動できる人間に変わつていく人がこれから増えていくことを私は願つてゐる。もちろん募金も一つの方法だし、町中で困つてゐる人がいたら声をかける、電車で席を譲るなど、ほんの些細なことでも、その人は立派な「人のために行動できる人間」である。そんな人が増えていけば世の中はますます良い方向に進んでいくのではないだろうか。自分が変われば、世の中も少しずつ変わつていく。逆に自分が行動しなければ、世の中にも良い風は吹かないだろう。世の中は見えてゐることが全てではないし、自分達は視野が広いわけでもないし、物知りなわけでもない。世界にはまだまだ不自由な生活を送つてゐる人がたくさんいて、その方々を救う方法もたくさんある。だからこそ、自分達が行動するべきなのではないだろうか。

## 思いやりをもつて

鹿島高等学校附属中学校 三年

西<sup>にし</sup>田<sup>だ</sup>太<sup>たい</sup>志<sup>し</sup>

「おばあちゃんどう元気？調子はどう？」

私がそう声をかけると、祖母は体を少しだけこちらに向け、微笑む。声を出してはくれないもののいつも私の声に反応してくれる祖母を嬉しく思うと同時に、体が細く弱つていく姿を見て、とても心配だつた。

今年の春休みに入ったころ、祖母の身体に膵臓癌が見つかり入院することになった。ステージ4で打つ手がなかつたことや、家族で話し合っ

た結果、最期の一ヶ月間は伯母の家で看取ることになった。コロナウイルスの流行もあり、祖母に会えたのは退院した日の夜だった。私が、「どう？元気？」

と声をかけると祖母は、

「本当につかれた、もう入院は嫌だよ。」

と笑った。元気そうな返答に少し安心した。それからの春休み、私は毎日祖母の家に行き、一緒に食事をしたり、調子がいい時には外に出かけたりした。祖母に会う時、私は決まって、

「調子はどう？元気？」

と声をかけた。

ところがある日突然、祖母は寝たきり状態になってしまった。

「元気？」

と声をかけても返答せず、体をこちらに向け、微笑むようになった。二ヶ月前までは元気で学校の送り迎えをしてくれた祖母が、癌が見つかった後も食事の量こそ減ったものの雑談をしたり出かけたっていた元気な祖母が、一変した姿に私は動揺した。その日を境に祖母はだんだん弱っていき、会話は疎か食事やトイレすら誰かの手助けがないとすることができなくなってしまった。

ある日、私は母と伯母に、半日だけ祖母の面倒を見ることを任せられた。最初はとても簡単なことだと思っていたが、世話をするということはとても難しく、大変だと体験を通して気付かされた。トイレまで運ぶ時は祖母に負担がかからないように、食事は食べやすい量を少しずつ、などなど今まで介護の経験が全くなかった私にとっては、とても大変で苦労した。薬を飲み眠りにつこうとしている祖母はおぼつかない口調で私に、

「ありがとう。」

と久しぶりに声を発してくれた。私はこの半日の経験で介護がいかに大変で難しいということ、相手のことを考えて支えてあげるのが大切なのだということを知った。

それから私は極力祖母の世話の手伝いをするようにした。また、寝たきりになってからはあまり反応しなかったがコミュニケーションをとるようにした。声を発してはくれないものの祖母は毎回こちらに体を向け、微笑むという形で返事をしてくれた。今まで私が気付かなかっただけで、ベッドや手すり、車椅子など人を手助けしてくれる物や、看護師さんやお母さん、伯母など支える人の思いやりで介護が成り立っていることを知った。

そして今年の立夏、祖母は母と伯母が見守る中、眠るように静かに息を引きとった。癌は患った人にとっても家族にとっても苦しくて、悲しいものだと思う。その苦しい中でも相手を思う思いやりや優しさ、コミュニケーション、そして笑顔がみんなを温かく包んでくれるのだと思う。祖母とは十四年間しか一緒にいられずとても悲しいけれど、祖母はいつも笑顔で私と接してくれていた。そんな祖母の分まで私はこれから、人に対して優しく笑顔で、思いやりの気持ちをもって、生きていきたい。





## 優 秀 (高等学校生の部)

### その言葉、本当に必要？

鹿島高等学校 一年

石川 夢華

「言葉」それは、時に凶器ともなる。知らぬ間に誰かの心を切りつけ、傷をつけていると思う。私は、普段生活している中で、誰かが放った一言で悲しくなったり腹が立ったりすることがある。何気ない一言であつても、「それ必要ある？」と感じることが様々な場面で訪れる。きつとこのような経験は大多数の人があるだろう。言った側は冗談のつもりであつても、どう捉えるかは相手次第だ。私は、その場の雰囲気や壊れることを恐れ、なるべく態度に出さないようにしているが、果たしてそれは正しいのかとも思うようになった。中学生の頃からいじられることが増え、時には冗談と分かつていても、他人の言葉をいちいち真に受けて深く考えてしまうようになった。あの言葉は本心なのだろうと勝手に自分で決めつけたりネガティブ思考になっていたり、どう自分の気持ちと向き合うべきなのかわからなくなる。「こんなこと言う人と友達なの？」と思ってしまうこともある。気遣う言葉、励ます言葉、それらが例え一〇〇あつたとしても、傷つける言葉ひとつの方が記憶に残つてしまうものではないか。実際に今まで何度も言葉に救われてきた。それでも、嫌だった言葉ばかり思い出せる。このように感じている人は私以外にもいるだろう。ここまで綴ってきたことは当然ながら、逆もまた

然りである。

自分が他人を傷つけていることがあるかもしれないということだ。私に友人に対して、冗談を言ったり無意識に言ったりした言葉も相手はどのように捉え、どのように感じているかはわからない。わからないうちに追いつめてしまう可能性が一〇〇%無いとは自信をもって言うことはできない。だからこそ、言う必要のない一言を放つべきではないと思う。

では、「必要のない一言」とはどんなことだろうと深く考えてみたときに出てきたのは、共感するつもりであつたり、気配りのつもりがかえって不快にさせてしまうということ。わかっているのにあえて悪口、文句を言うこと。さまざまではあるが、どれも些細な一言が傷つける原因になつていると思う。一人ひとりにそれぞれの考え方があり、自分と相手が必ずしも共感し合うことができるわけでもないし理解した上で発言するべきなのではないか。これは、日常の会話だけでなくSNSなどを利用する上でも気をつける必要があると思う。現代の高校生ならばほとんど利用しているからこそ、SNS上の誹謗中傷も増えている。心無い言葉を浴びせる人も見ることが多々ある。一人が言うに乗つかつて罵声を浴びせることが果たして、言われた側が幸せになるのか。言った側にも利点はあるのか。どちらも答えはNOであるはずだ。でも、人は叩くことで快楽物質「ドーパミン」というものが出るという。常に抱えているストレス、不安を解消するために心無い言葉を浴びせ、自身の心を満たしているのだ。しかし、この方法は間違っているから、被害者が増える。

「言葉」はいつでも凶器となり、自分が放つた何気ない一言であつたとしても傷つけることもある。この先、発言する前は「この一言は本当

に必要なのか？」と自分に問いかけ、大切な人をこの一言の凶器で傷つけないように生きていこうと決めた。

## 笑顔にさせるためにできること

鹿島学園高等学校 一年

大槻咲花

皆さんは、笑顔になるとはどういうことだと思いますか。そして、一日一回でも笑顔になれる瞬間がありますか。

私が笑顔になれる瞬間は、高校でできた新しい友達とくだらない会話をしたり、部活を一生懸命頑張れた時です。会話と言っても、人と話すことは毎日することで、当たり前なことだと思っている人も多いと思いますが、とても大切なことでもあります。人と話すことで笑顔になれるという至ってシンプルなことが幸せの一つだと思います。笑顔になれるきっかけは、年齢や性別などによって違います。私は会話以外でも、美味しいご飯を食べたときや、今まで頑張っていた人の努力が実った時、自然と笑顔になることができます。人それぞれ笑顔になれる瞬間や楽しいと思える瞬間が違っていても必ず一つはあるはずですよ。その一つを大切にすかしないかで、笑顔になれるかどうかが決まると私は思います。

私達人間は、調子の良い日、悪い日があつて当たり前のことだし、笑顔になれる時があつてもしょうがないことだと思います。でも、そんな時こそ楽しかったことを思い出したりして、自然と笑顔になることが大切だと思います。今現在、新型コロナウイルスの影響によって、体育祭などの行事が中止になり、マスクを外して笑い合っていたのが当たり前ではなくなつてしまいました。私達の青春は、少し後悔と寂しさが

残っています。マスクをつけていることで、本当の表情や気持ちを読み取ることが難しく、笑顔になれる瞬間が減った人も中にはいると思います。どんなに辛い制限をかけられても、たった一度しかない人生を後悔で終わらせない人は最後の最後まで笑顔でいることを忘れなかった人だと思います。みんなが笑顔になるために、今の自分にできることは何かと考えた時に、一番に思ったことは、辛い思いをしている人のそばにいてあげること、そして話を聞いてあげることができると思いました。自分が辛い時、誰かそばにいてくれて話を聞いてくれると気持ちが楽になつて笑顔になれることができました。人の話をしっかりと聞いてお互いが笑顔になれるように普段から周りを見て聞き上手になろうと思います。

また、人を笑顔にさせる方法は他にもたくさんあります。人を笑わせる力をもっているわけでもない私が笑顔にさせるには、積極的にボランティア活動に参加したり、困っている人がいたら助けたり、声をかけたリするなどの優しさも人を笑顔にさせるきっかけになると思います。ボランティア活動に対しては中学校の時に参加をしたことがあります。内容としては花を植えるという至ってシンプルなことだけど、地域の人々と交流をすることで人との繋がりの大切さや花を植えるだけで花のように心も落ちつき、気持ちのリフレッシュにもなりました。ボランティアに参加していなかったら感じ取ることができなかった楽しさを味わうことができませんでした。

まだ高校生で分からないことも多く、地域の人々と交流する場面も少ないです。なのでもっと積極的にボランティアに参加をして、地域の人々と話をして笑い合つて楽しい暮らしができるようになりたいです。自分がみんなに笑顔を届けられるような存在になれるように毎日笑顔でこれからの学校生活、人生に向けて頑張っていきます。

# 支えあい

鹿島高等学校 二年

原<sup>はら</sup>田<sup>だ</sup>沙<sup>さ</sup>良<sup>ら</sup>

私は、今までたくさんの方々の地域の方々やボランティア活動をしている方々に、支えられながら日々を過ごしてきました。そして実際に夏休みや冬休みの間アルバイトをして地域の方々とのふれあいや支えあい、助けあいの大切さを改めて学びました。また、高校生になり自分もボランティア活動をしてみたい、少しでも多くの人を笑顔にしたいと思いボランティア活動を始めました。

高校生になりできることが増えた私は、小学校からあこがれをもって来た鹿島神宮の巫女さんの助勤活動の面接を高校一年生の冬に受け、短期間でしたが巫女さんとして助勤をしていました。小さい頃から鹿島神宮には、お散歩でおじいちゃんと神宮の森を歩いたり、鹿にえさをあげに行ったりしていました。小学校では、校外学習として鹿島神宮について学びに学年全員で歩いて神宮まで行ったり、版画を図工の作品として作る授業の時には楼門の前など神宮の敷地内の好きな所で絵を描いたりしました。中学校では部活動の仲間達と大会前に訪れ、心の支えとなりました。高校生になってからも、毎日学校がある日は通学路として神宮の森を抜けて通学しています。鹿島神宮は私にとってとても思い出のつまった大切な場所です。そしてたくさんの方々の地域の方々や友達などの助けあうことや絆を深めることができた場所でもあります。アルバイトをしていて一日中立ち仕事で外に面している所で働いているのでとても寒く体力的にも大変なところはありましたが、お客様の「ありがとう」の一

言でやっていてよかったなと思い頑張ることができました。私もささいなことでも感謝の言葉は忘れないようにしようと思いました。初めてのアルバイトでしたが、鹿島神宮の宮司さんや巫女さん、そして御朱印場で一緒に助勤していた先輩方に支えてもらい最後まで楽しく活動し、鹿島神宮の地域との強い結びつきや地域の方々との関係や支えあいについて学ぶことができました。

私は高校生になり鹿島リーダーズクラブという部活動に入部しました。入学する前から、お母さんが高校生のおときに鹿島リーダーズクラブに入っていたので活動内容などを知ることができ、この部活に入りたいと思うようになり入部を決めました。主な活動は、学校内の清掃や、学校説明会の案内や準備、近くの小学校の児童クラブのボランティアなどを行っています。夏休みなどの長期休業では、保育園に行き一緒に遊んだり行事のお手伝いなどをしたりしています。また、私は鹿嶋市の高校生ボランティア団体に一年生の頃から所属しています。一年間を通してくさんのボランティア活動を行い、今まで自分が多くの方々に支えられて生活してきたかを改めて学ぶことができました。ひとり親家庭の方を対象としたお米、食べ物、生活用品などを無料配布するボランティアに参加したときに、「ありがとうございます」と言われこの活動に参加して良かったと思いました。笑顔で帰って行くみなさんを見て、このようなボランティア活動で少しでも多くの方々の助けに、そして幸せになってもらえればいいなと思います、これからもボランティア活動を続けていこうと思いました。

自分で実際に行動し、見てたくさんの方々とのコミュニケーションをとることやわかることや学べる事が多く、地域の方々の支え合いの大切さを改めて学ぶことができました。一人一人の小さなボランティアや思

いやりをもった行動でたくさんの方の幸せや笑顔につながる事がわかり、これからもボランティア活動を続け、地域の方々の幸せや笑顔につなげていきたいと思っています。

## 高齢社会について

鹿島高等学校 二年

新井 美羽

現在の日本では少子高齢化が進行していて、お年寄りの数がどんどん増加しています。しかし、子どもの数は減少しています。このことを考えると、将来的には「少ない子ども数で、多くのお年寄りを支えなければならぬ」ということになってしまいます。

お年寄りの方の数が増えていく中で、支援を必要とする一人暮らしの高齢者の生活を支えるためには、充実した制度が必要だと私は考えます。私が必要だと考える制度は、交流する制度です。高齢者に不足していることは周りの人との話す時間やふれあう時間だと思っています。よく一人暮らしの高齢者が身寄りの人がいないために孤独死するケースを目にします。そのようなことが起きないためにも、高齢者が周りにいる人と交流する機会をつくり、高齢者が楽しく暮らせる生活をつくることが大切だと思っています。また、日常的な家事を手伝う人がいるということも大切だと思っています。私の家では、祖母が家の洗濯をしています。重い洗濯カゴを持ち運んだり、料理をしたりしています。その姿は大変そうにみえます。私は夏休みに入ってから、祖母のお手伝いをしています。また、祖母は足が悪いので階段の昇り降りも私が手伝っています。私ではきるだけこの休暇の間に祖母が少しでも楽しんでいられるようにお手伝いを

してきたいと思います。このように私の周りにも支援や介護を必要としている高齢者はたくさんいるので、介護や支援を理解するために、社会の高齢化について理解を深めていきたいです。また、現在の社会では認知症を患った高齢者が増え続けています。高齢者が介護を必要とする理由は、認知症にあるという結果があります。認知症を予防することは、介護状態を予防することでもあると私は考えます。では、介護生活における問題にはどのようなものがあるのでしょうか。私が調べたところ、介護生活が始まったあとに起こりうる問題というのは、両親の介護の度に仕事を休む必要があること、介護するための知識不足などがありました。こうした問題を解決するためにも、両親や身内の人の介護が必要になった時のために、介護についての幅広い知識を身につけておくことが大切です。こうした介護や支援には思いやりをもって、取り組むことが必要だと思っています。日本の介護への需要が高まる中で思いやりの心と敬意の心を忘れてはいけないと思います。介護する側である私たちが介護される側の高齢者に対して「世話をしやっている」という勘違いや思い込みをすることは良くないと思います。

私がこの高齢化社会において大切だと思うことは、思いやりの心をもって高齢者と接することや、高齢者がしてほしいことは何かを考えながら生活していくことだと考えます。耳が聞こえづらい方や歩くスピードがゆっくりな高齢者の方もいると思います。そこで私は、そういう人達と接する時には思いやりの心をもって、大きな声でゆっくり話すことや歩くスピードを高齢者に合わせることを実践したいと思っています。今後、もっと介護や福祉の需要が増えていくので、福祉についてしっかりと考えたいです。また、近所で高齢者を見かけた時はあいさつをして、関わりをもつようにしていきたいです。身近にある福祉には何があるのかなど福祉に興味をもつということが大切だと私は考えます。

## 人と人を繋ぐもの

鹿島学園高等学校 二年

石坂 さくら

今年の夏、私は東京にある予備校の夏季講習に、埼玉県で一人暮らしをしている兄の家から約一ヶ月間通っていました。その時にとっても不思議に思うことがありました。今までテレビやスマホの画面で見てきた通り、駅の中や駅前では歩いている人たちがとても多かったです。当たり前前かのように人と人との間を器用にすり抜けていました。その光景は田舎で育ち、通学の際には近所に住むおばさんが優しく「いつてらっしゃい」と、言ってくれるような環境で育ってきた私にとっては、とても奇妙でした。

この不思議な体験を帰ってきた時に母に話してみました。母も、「都会でよく見るその光景は確かに奇妙だと思う」と、共感をしていました。私はしばらく、何故こんなにも不思議で気になってしまうのだろうかと考えました。普通私が住む地域を歩いていると、外を歩いている人の数は東京と比べ物にならない程少ないですが、一人ひとりすれ違うたびに「おはようございます」や「こんにちは」と、挨拶をします。この「挨拶」が、私の住む地域では当たり前のように行われます。挨拶というの、お互いがお互いの存在について認識していかないときません。例えば、私が誰かとすれ違い、私がある人に挨拶してもその人がイヤホンで音楽を聴いていて私に気付かずに行ってしまったら、挨拶ができたといえませんが、一方が挨拶をし、もう一方がそれに気付き挨拶を返すことで「挨拶」が成立すると思います。

ところで、何故私たちはすれ違う人達に挨拶するのでしょうか。小さい頃に、よく学校で先生たちから「地域の人たちに挨拶をしましょう」と言われていたのを思い出しました。そのため、最初は「挨拶をしなればいけない」という義務感が強かったです。しかしいつの間にか、挨拶をすることで自分と相手との間に目に見えない「何か」が結ばれるような感じがするようになりました。「何か」で結ばれると、挨拶した人のことをただの「他人」だという風に感じません。その地域に住み、生活を営んでいく「仲間」のような感覚が芽生えます。よく私の祖母が私たちの住む田舎では、人と人との距離が近いといいますが、この挨拶をした時の感覚も、人との距離の近さがあるからこそ生まれるものなのかもしれません。そして、挨拶をしてよりその人と距離が近くなったように感じるのだと思います。

都会を歩く人たちの間に、この「何か」で結ばれる人との距離の近さは無いと思います。物理的な距離は田舎よりも近いですが、人と人の心の距離はお互いずっと遠いままで。

今まで私は、自分が住んでいる地域に対する、いわゆる「地元愛」というものが自分の中になく思っていました。しかし、まちの人と挨拶をすることで生まれるものは、自分ももっている地域への愛がないと生まれてこないのではないかと気付きました。この気付きによって、人とすれ違って挨拶をすることができる心の距離というものがとてもあたたかいものに感じられるようになりました。

今の時代では、人と人との距離というものは物理的に制限されがちです。ただそんな状況の中でも、私たちはお互いに繋がりがあっていけると思います。

## 【佳作入選作品】（小学生の部）

だれかのためになにかをすること	波野小学校 一年	宮野	航
みんながえがおになるくらし	鹿島小学校 一年	貝原大真	
ばあちゃんのいろいろ	高松小学校 一年	樋口瑛大	
みんなが えがおになる くらし	平井小学校 一年	大宮奏汰	
小さいもうと	大同東小学校 一年	立花陸月	
みんなえがお	波野小学校 二年	藤崎彩葉	
うれしかったこと	波野小学校 二年	池田千奈	
ぼくのおおばあとおおじい	豊郷小学校 二年	山道亮太	
やさしさのバトン	高松小学校 二年	久保庭美織	
みんながえがおになるくらし	鉢形小学校 二年	中村空詩	
ありがとう	三笠小学校 三年	石澤樹	
思いやりの心	鉢形小学校 三年	花見玲奈	

えがおのありがとう

声をかける勇氣

みんなが笑顔になれるように

わたし達のえ顔がかがやく世界

ジェンダーレスを目指して

介護について

ほんとうのやさしさとは

おばあちゃんへの想い

笑っている時間

にんぶさんにやさしく

楽しかった子供食堂

今だから気づいたこと

耳を傾け対話をしよう

みんなが笑顔になるくらし

家族と福祉と介護

豊津小学校 四年 山口花音

高松小学校 四年 嶋田透士

平井小学校 四年 平石心春

鉢形小学校 四年 細田朱里

大同東小学校 四年 飯島義基

豊郷小学校 五年 細田侑莉彩

豊津小学校 五年 坂本紗良

鹿島小学校 五年 梅本ことは

高松小学校 五年 島田優羽

中野西小学校 五年 平塚陸斗

波野小学校 六年 宮本樹希

三笠小学校 六年 高橋結衣

三笠小学校 六年 和田ひなの

大同東小学校 六年 菅谷妃凰

大同東小学校 六年 寺内龍弥

## 【佳作入選作品】（中学生の部）

笑顔の理由	鹿島中学校	一年	君和田	椿
ぼくの曾祖母	鹿島中学校	一年	白井	健
介護について私が思ったこと	大野中学校	一年	大西	暁光
普通とは何か	高松中学校	二年	大鷲	礼子
私の家族	鹿野中学校	二年	笹森	陽向
笑顔あふれる暮らしへ	平井中学校	二年	栗田	ひより
動物遺棄は犯罪	鹿島高等学校 附属中学校	二年	徳田	彩音
「助けて」と言われなくても	鹿島高等学校 附属中学校	二年	宮本	悠加
みんな同じ	鹿野中学校	三年	鹿島	凜乃
耳が聞こえにくい祖父	平井中学校	三年	古賀	遥香
私のおじいちゃんと高齢社会	大野中学校	三年	長岡	愛

## 【佳作入選作品】（高等学校生の部）

私ができること	鹿島高等学校	一年	砂田	晴香
お母さん、私がやるよ	鹿島高等学校	一年	槐	瑠椛
好きなものを好きだと言える 世の中にしたい	鹿島高等学校	一年	中島	倅加
障がいがあっても	鹿島学園高等学校	一年	香取	汐音
ひそかなサイン	鹿島学園高等学校	一年	小川	かりん
やさしくするってどんなこと	鹿島高等学校	二年	田村	駿平
私たちの学校生活の裏側	鹿島高等学校	二年	山本	雪乃
愛犬から学ぶ「一年をとること」	鹿島高等学校	二年	高安	美佳

# 児童生徒福祉作文応募数

## ●小学校

学 年	応募数
1 年	83
2 年	96
3 年	122
4 年	117
5 年	105
6 年	119
合 計	642

## ●中学校

学 年	応募数
1 年	248
2 年	59
3 年	57
合 計	364

## ●高等学校

学 年	応募数
1 年	147
2 年	139
3 年	0
合 計	286

## ●応募総数

小 学 校	642編
中 学 校	364編
高 等 学 校	286編
合 計	1,292編





